

報告

論じる行為への理解を進める論文・レポート作成支援表現集の開発

二通信子¹、大島弥生²、因京子³、佐藤勢紀子⁴、山本富美子⁵

さまざまな留学生の作文教育に取り組んできた5人の研究者の実践経験に基づき、370あまりの文型を論文の実例と共に提示する表現集を作成し、大学のコースで試用した。この表現集は、以下のような特徴を持つ：1) 論文のタイプを理系・文系の区別ではなく、実験・調査などによる検証を目的とした論文（本稿では「検証型論文」と呼ぶ）と、文献などに基づく論述過程に重点を置く論文（本稿では「論証型論文」と呼ぶ）という研究手法の違いとして提示した、2) 疑問を提示する、研究の必要性・重要性を示すなど、論じる行為を成り立たせる各行動すなわち「研究行動」を表現集の項目とした、3) 一つの項目、すなわち各研究行動について、基本的な文型とその応用的バリエーションとを示し、様々な専攻分野の論文からの実例を付した。試用の結果から、この表現集は、言語表現の学習を通して研究行動の概念の理解を進めることに具体的な一助を提供したと考えられる。

キーワード：アカデミック・ライティング、論文表現集、検証型論文、論証型論文

1. はじめに

近年、学部留学生に加え、大学院進学をめざす留学生も増加しており、レポートや論文などの学術的文章作成への支援が求められている。そうした状況を反映してアカデミック・ライティングの学習教材が相次いで開発され^{1), 2), 3)}、また、専門分野に特有な論文の構造や表現についての研究も進んできている^{4), 5)}。しかし、学習者自身が日本語の論文表現を学ぶ参考書としては、理工系レポートに特化した参考書¹⁾があるのみで、それ以外の分野の学習者を対象とした表現集はまだ出されていない。現実には多くの機関で、多様な分野の留学生が混在する状態でライティングの学習が行われていることから見ても、幅広い分野の留学生を対象とした論文表現集が求められていると考えられる。

一方、大学院で研究活動に参入しようとする留学生

が抱える問題点として、日本語のみならず母語においても、論文やその作成過程についてのスキーマが乏しいということがある。しかも、現状では論文やレポートの作成についての学習の機会はきわめて限られている。こうした留学生に対しては、単に表現を羅列して提示するだけでは不十分である。論文の全体像とともに、論文の中で行われている研究行為と結びつける形で文型や表現を示す必要がある。なお、本報告では「表現集」という名称を使っているが、主に取り上げているのは論文・レポートに特有の文型である。

現在開発中の表現集の概要は以下の通りである。なお()内の数字は、第2部については文型数を、第3部においては接続表現の数を示す。

<表現集の概要>

対象者：学部及び大学院などで論文やレポートの作成に取り組む留学生及び日本人学生

目的：独習または教師の指導のもとに、論文に必要な要素、論文の構成や表現、論文・レポートの構想のプロセスなどについて学ぶ

基本的な構成：

第1部 論文・レポートの構成例

¹ 東京大学留学生センター教授

² 東京海洋大学海洋科学部准教授

³ 日本赤十字九州国際看護大学看護学部教授

⁴ 東北大学高等教育開発推進センター教授

⁵ 武蔵野大学文学部教授

構想からアウトライン作成までの過程

第2部 論文・レポートの構成要素と表現

- 序論 I 研究の目的(16)
- II 背景説明(59)
- III 先行研究の提示(37)
- IV 研究行動の概略(12)
- 本論 I 研究の方法(10)
- II 結果の説明(68)
- III 考察①(43)
- IV 考察②(83)
- 結論 I 結果の確認(12)
- II 結果の評価(18)
- III 課題の提示(27)

第3部 つなぎの表現

- I 助詞の働きをする表現(43)
- II 語・句・文をつなぐ表現(85)

コラム 論文作成に必要な日本語の知識

(引用の方法、研究行動を表す動詞、ほか)

本報告では、以下の2～4で表現集の特徴および従来の教材との主な違いについて説明する。

2. 論文のタイプに着目した構成例の提示

表現集では序論—本論—結論という論文の基本的な構成に沿った表現の提示に加え、「検証型」「論証型」というタイプ別の構成例を示し、そこから表現を検索できるようにした。

論文の構造の違いについて説明する。Wallace and Wray⁶⁾は論文のタイプとして、①theoretical(理論的な知識に重点をおいた論文)、②research(体系的な調査の成果に基づく論文)、③practice(筆者自身や他者の実践に基づく論文)、④policy(政策立案者が方針を明確化するための論文)の4つを挙げている。ここではこの中の①、②のタイプの論文の構造の違いに絞って検討する。

アカデミック・ジャパニーズ研究会⁷⁾の教科書では、「実験／調査型」、「理論型」の二つのタイプのモデル論文を提示し、序論の展開、分類や定義の提示位置などに関する両者の違いを説明している。一方、山崎ほか¹⁾では理工系レポートを「実験して結論を得る場合」と「理論計算で結論を得る場合」に分けて構造を提示

し、「目的」の次に、前者では「実験方法(理論を含む)」を書くのに対し、後者では「理論」、「計算方法」を書くと指摘している(p.254)。

筆者らは論文のタイプの分類にあたって、理系・文系という従来の枠組みとは別の<研究手法による論文の構造の違い>に着目した。筆者らのこれまでの教育研究や多くの論文についての観察結果から、文系・理系のそれぞれに様々なタイプの論文が存在しており、必ずしも理系・文系という分け方が適切とはいえないと判断したためである。

論文タイプの分類については、さらに綿密な調査や検討が必要であるが、表現集では「検証型」論文と「論証型」論文の二つのタイプを取り上げ、その構造の違いを示した。下はそれぞれのタイプの論文をモデル化して比較したものである。

1) 「検証型」論文の構成例

序論【目的→先行研究→方法】

本論【実験・調査→結果→**考察**】

結論【結果の確認】

—考察部分では、調査・実験の結果(事実)の解釈や検討を行う。結果と考察が結合される場合がある。結論では調査や実験でわかった事実、考察内容の確認を行う。

2) 「論証型」の論文の構成例

序論【問題提起】

本論【**先行研究・議論・考察**】

結論【議論のまとめ】

—「序論」では、研究領域の特定、考察の範囲、論理的な枠組みを示す。「本論」では、先行研究や他者の言説を引用しながら考察し、ある方向に議論を進める。例えば、先行論文「X」の議論をめぐって「他者の研究の提示／要約／整理」→「他者の論点の考察／検討」→「自身の見解の提示」のように考察を進める。「結論」では、それまでの議論にもとづく、筆者の考察の到達点の確認を行う。

次頁の表1は「検証型」、表2は「論証型」の構成例である。なお、表2で取り上げた項目や配列は最終的なものではなく、現時点での一つの案である。また、ここに挙げた要素がそれぞれのタイプのすべての論文に入るとは限らない。

表1 「検証型」論文の構成例

タイトル <要旨、キーワード> 1. 序論／緒言／はじめに ・背景説明 ・先行研究の提示 ・研究の目的 2. 方法 *方法、結果は過去形で書く。 ・実験・調査の方法、データ解析 ・実験材料、被験者、対象者、など ・理論的枠組み、原理 3. 結果 ・データの提示 ・データについての説明 ・判明事項の指摘 4. 考察 ・結果の妥当性の確認 ・結果についての解釈 ・予測と異なる結果への言及 5. 結論／緒言／おわりに ・研究の評価 ・今後の課題 <謝辞><注><参考文献><付録>

表2 「論証型」論文の構成例

タイトル <要旨、キーワード> *「論証型」論文は、「検証型」論文に比べ、構成に幅がある。ここでは一例を示す。 1. はじめに ・問題の背景と注目すべき点 ・問題提起 ・研究の目的や必要性 2. “対象”の詳細と研究の方法 *短い場合、1.と結合されることもある ・“対象”の定義・位置づけ ・経緯や来歴の説明、資料紹介 ・先行研究での“対象”の扱われ方 ・この論文での分析の仕方 3. 考察 ・事例別、分類別、時系列などによる分析 ・要因等の推論、解釈、評価、など *さらに別の側面からの分析を加える場合もある。 4. おわりに ・研究のまとめと評価 ・今後の課題、提言、など <謝辞><注><参考文献><付録>
--

3. 論文の構成要素

本表現集のもう一つの特徴は、論文全体の構成要素の抽出にある。近年、論文の構成要素に注目した研究が進められている。例えば、村岡ほか⁴⁾は農学系・工学系論文の緒言部分について「領域提示」「研究動向提示」「課題設定」「論文概要紹介」の四つの構成要素を特定し、また、木本⁵⁾は法学系論文の序論から「研究領域の提示」「研究の必要性の提示」「その論文についての説明」の三つの構成要素と13の下位項目を取り出している。これらの研究は構造の比較的安定している緒言部分を対象としたものである。それに対して、本表現集では、論文の構成要素を「論文を成り立たせている行為」ととらえ、論文全体を対象に構成要素と文型の抽出を行っている。さらに、構成要素の単位の差がある。村岡ほか⁴⁾が論文中の段落を単位として構造の把握をしているのに対し、本表現集では個々の文型に着目して抽出しているため、構成要素をより小さな単位で取り出している。今回、資料とした40論文^{註1}

から筆者ら5人が分担して、56項目の構成要素、および373の文型を抽出した。

下は本論中の「考察」部分の構成要素の例である。「考察①」では、主に「検証型」タイプの論文の構成要素を、考察②では、主に「論証型」タイプの構成要素を取り上げる。

<「考察①」の構成要素の例>

- ・結果を再確認する
- ・結果を解釈する
- ・先行研究との関係を示す
- ・原因・結果を述べる
- ・研究方法の妥当性について述べる、ほか

<「考察②」の構成要素の例>

- ・中心的な問題を示す
- ・議論の前提や条件を示す
- ・比較して論を展開する
- ・他者の議論を整理し、自分の議論に結びつける
- ・他者の見解を評価する、ほか

表3 文型、例文の表示の例

本論Ⅲ 考察11 判断の根拠を示す

Aは実験・調査などの結果から、Bは文献や資料など外からの情報を根拠にして判断を述べる場合の表現である。

A: 結果/事実 [から/より]〜と[言える/考えられる/推察できる/うかがえる]。

▶ 結果/事実 に基づけば、〜は〜と判断できる。

▶ 結果/事実 から判断すれば、〜は〜である。

B: 文献 に [示されている/指摘されている] ように、〜と言える。

▶ 文献 に指摘されていることから、〜は〜である。

<論文からの実例の一部>

A-1 【国際関係論】欧州企業が自社製品にエコ・ラベルの導入を決めたことなどから、各NGOによる啓蒙活動の結果、欧州市民の間における海洋環境保護の意識は急速に高まっていると考えられる。

4. 文型等の提示方法

表3は表現集のある項目の例である。表現集では、項目ごとに文型や実例を以下のように提示する。また、実例を除き英訳を付けるが、表4では省略する。

- 1) 文型の具体的内容の部分に、「結果」「事実」などの概念を示す語を入れて文作成の手がかりとする。
- 2) 文型を典型的なものとそのバリエーションに分け、階層的に提示する。表3のA、Bのゴシック体の部分は基本的な文型を、それ以外の文型はそのバリエーションを示す。
- 3) 実例の前にその論文の分野名を示す。実例のA-1の記号は、実例の太字部分の文型が上のAの文型グループの用法に該当することを示す。
- 4) 実例の中で、異なる構成要素の組み合わせによるディスコースの展開を示す。下はその例である。

<序論Ⅲの「先行研究の提示」の実例>

A-1 冠動脈疾患の患者では有酸素運動が心身ともに有用であることが知られている。しかしながら、健康人の長時間の有酸素運動プログラムによる気分改善効果は、十分には検討されていない。(序論Ⅲ3「分野での共有知識を示す」→序論Ⅲ5「研究がさらに必要な点を示す」)

5. 実践事例とそれについての考察

5.1 表現集試用版を用いた授業

本表現集は独習使用を意識したものであるが、クラスで使用することもできる。ここでは、大学院授業で表現集試用版を用いた実践を紹介し、その結果と表現集の課題について考察する。本事例は博士前期課程(修士)の正規科目(2単位、90分×14回)であり、対象は修士1・2年生9名(日本語母語話者2名、中国人学習者7名で日本語力は中級1名、上級6名)であった。各自の専門分野での研究の進捗状況については、研究課題が細部までしぼりこまれて実験に着手している学習者、修士1年になったばかりで大きなテーマはあっても研究課題の細部まではしぼられていない学習者が混在していた。ゼミなどにおいて、各分野の先行研究

表4 授業の内容

段階・回数 (全14回)	授業内容
導入段階 1回目	①授業の目的と教材の設計意図・使い方の説明 ②教材から各種の表現を抜粋して教師が説明
研究行動の読み取りと分析の段階 2〜8回目	③個々の学習者が自分の分野の先行研究論文で当該研究行動が書かれた部分をマークして抽出 ④レジュメ(A4で1〜2枚程度を宿題として作成)と同時に他の学習者にもマークした部分を発表者が印刷して他の学習者に配布し、その論文の概要と使われている表現の特徴を他の学習者に口頭で説明(1論文30分程度) ⑤発表に対する相互評価(自分の担当した論文との構成や文型の比較について、5段階の評点とコメントで評価)
研究行動の書き込み段階 9〜12回目	⑥表現集の文の型を用いて各自の分野の文を書いてみる ⑦推敲のポイントの学習 ⑧自己推敲と相互推敲
振り返り 13〜14回目	⑨試験(表現・構成要素・頻出語彙の確認) ⑩学んだこと全体の振り返り

論文を読んだ経験は全員あったが、英語文献しか読んだことがなく、日本語の学術論文を初めて読んだという者もあった。この授業実践では、毎頁の文型を短作文練習の課題のように使用するのではなく、各自が選んだ先行研究の論文（おもに雑誌掲載論文・報告で、2ページから10ページ）に書かれた研究行動の読み取りの際に、表現集の各表現を標識として利用するという手法をとった^{注2}。学習者各自の書きの練習は、読み取りに基づく発表を終えた次の段階に配置した（表4参照）。

5. 2 授業の教育効果と課題

表4に示す③～⑤の作業後の参加者の感想（口頭）は、次の2点にまとめられる。

1) 表現集や表現の分析・抽出作業の有用性の確認

- ・「論文を見たら、教材の文型が実際にたくさんに使われていた（複数談、中国）」
- ・「取り出した文例は、実際にすぐに修論に使えそう（複数談、中国）」
- ・「自分の修論では、今回分析した調査論文の部分をいくつか並べて、それを現状報告のような大枠で囲む形になる。その双方で使えそうな文例があった（談、日本）」
- ・「今までも日本語の論文を読んだことがあったが、今回論文から抽出した文例には、今まで使ったことなかった表現がたくさんあった（談、中国）」
- ・「専門のゼミでは英語の文献を日本語に訳して報告するという作業をしているが、難しくて大変だった。今回初めて日本語の論文の文型を分析してみて、英語を読んで日本語で報告するよりずっと簡単だった。自分が日本語論文を書くときはもちろん、次に英語論文を読むときも、読みやすくなると思う（談、中国）」

2) 論文の構造的・表現的特徴の把握

- ・「自分が選んだ論文は『総説』だったので、出てくる文型が実験の論文とだいぶ違った。それでも、必要性や目的ははっきり書かれていた（談、中国）」
- ・「自分が選んだ論文は、完全な仮説検証の型とは異なり、緒言と結論がほとんどないものだった。他の人の報告した論文に比べて、先行研究の実験結果と異なる結果になった部分を強調していた（談、中国）」

上記1)の感想からは、教材で示された表現の有用性を学習者が確認したことがうかがえる。また、2)からは、この作業によって、論文の構造的・表現的特徴を把握したことがわかる。このように、目標文書スキーマが形成されつつある修士1、2年生においては、各自の分野の文章から当該表現を抜き出すことはたやすく、その分野でどのような表現が頻繁に用いられているかについて分析的に捉えることもできた。

とはいえ、これらの表現を用いて各自の研究テーマで文を書く段階では、話題の選択はほぼできていても、日本語の習得段階に応じて統語的な誤りが生じるため、それを自己推敲できる範囲を徐々に広げていく必要がある。本教材を用いた実践においては、対象者の日本語力と目標文書スキーマのレベルに応じて、読み取りと書き込みのバランスを取ることが望まれる。たとえば、まだ十分に目標文書である論文のスキーマが構築されていない学習者であれば、いきなり表現を用いて書く練習をする前に、読み取りの練習を積んで、表現の適切な使用例のインプットを行うと、効果が高まるだろう。また、日本語力が不足している場合は、表現を用いて書く際に、統語的なレベルでの段階的な練習をまじえることが必要になるだろう。

6. おわりに

表現集の特徴と「試行版」を用いた実践の結果を報告した。開発中の表現集が、研究行動の概念と結びついた論文表現の学習の具体的な一助となることが確認できた。論文の構成例、構成要素、文型、論文からの実例などについては、さらに検討が必要である。授業での試用の結果も踏まえ、実用に向けて改善を行っていきたい。

注

注1 生物学、農学、化学、政治学、言語学、社会学、歴史学など多様な分野の専門家に論文の提供を依頼した。それ以外の分野についてはCINIIで公開されている学会誌などから論文を収集した。現在、理系・文系それぞれの専門分野の教員の助言を得て、それぞれの分野で代表的な学会誌及び論文を推薦してもらい、文型の見直しや実例の追加、差し替えなどを行っている。

注2 表4の③④⑤にあたる活動としては、例えば下記のような例があった。食品科学を専攻する学習者が、自分の研究に近い内容の実験を行った論文を選び出し、まず内容についてA4で1枚弱のレジュメを配布して他の学習者に説明し、さらに論文から抜き出した研究行動を表す表現の文(「...について検討を加える」等)についても別のレジュメ(A4で1枚弱)をもとに報告した。報告の中で用いられている副詞の種類や先行研究への言及のしかたなどを、この論文の特徴として指摘した。

参考文献

- 1) 山崎信寿・富田豊・平林義彰・羽田野洋子：科学技術日本語案内新訂版，慶應義塾大学出版会，(2002)
- 2) 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子：大学生と留学生のための論文ワークブック，くろしお出版，(1997)
- 3) アカデミック・ジャパニーズ研究会：大学・大学院留学生の日本語④論文作成編，アルク，(2002)
- 4) 村岡貴子・米田由喜世・因京子・仁科喜久子・深尾百合子・大谷晋也：農学系・工学系日本語論文の「緒言」の論理展開分析—形式段落と構成要素の観点から—専門日本語教育研究，第6号，pp. 21-28 (2005)
- 5) 本木和志：法学系論文の序論に見られる文章構造の分析—民法・商法・知的財産権法系論文を対象に—，専門日本語教育研究，第8号，pp. 19-26 (2006)
- 6) Wallace, M. and Wray, A. : Critical reading and writing for postgraduates, Sage Publications, pp. 81-82 (2006)
- 7) アカデミック・ジャパニーズ研究会：大学・大学院留学生の日本語③論文読解編，アルク，pp. 94-140 (2002)

Development of a resource book for writing that promotes the learner's understanding of academic arguing

NITSU, Nobuko* OSHIMA, Yayoi CINAMI, Kyoko SATO, Sekiko
YAMAMOTO, Fumiko

**International center, The University of Tokyo*

We have compiled a resource book based on collective knowledge and experiences of five researcher-educators who have been engaged in teaching of writing at different educational settings, and tentatively used the book in a writing course at a university. Our resource book, offering approximately 370 sentence patterns, has the following features: 1) The types of articles are recognized not in terms of BUNKEI versus RIKEI (liberal/social versus scientific/technological) but in terms of the difference in the research method: experiment/research-based versus literature-based; 2) Building blocks of the deed of arguing, i.e., research-actions such as posing a question which combine into an organized structure of article, serves as the entries of the book; 3) For each entry are presented several sentence patterns from very basic to applied, and each sentence pattern comes with examples from real journal articles in a variety of disciplines. In the tentative use, our book was observed to be of concrete and substantial help to the learner in enhancing his/her understanding of the nature of academic arguing through the learning of linguistic expressions.

keywords: *Academic Writing, Resource Book, Research Method: experiment/research-based versus literature-based*